

研究論文

教職大学院における対話的・協働的な学びに関する一考察 —共通必修科目「授業づくりと学級経営の基礎と課題」を例として—

米田 重和^{*1} ・ 竜田 徹^{*2}

A Study on Dialogical and Collaborative Learning at Graduate School of Teacher Education: A case of common compulsory course "The Basics and Issues of Lesson Planning and Classroom management"

Shigekazu KOMEDA, Toru TATTA

【要約】本稿では、佐賀大学大学院学校教育学研究科（教職大学院）の共通必修科目「授業づくりと学級経営の基礎と課題」を例として、教職大学院における理論と実践の往還を図る科目構成の意義を、受講者のレポートに基づき考察した。その結果、立場や経験の違う一般院生と現職院生が対話的・協働的に学習を進めることで同僚性が培われ互恵的な学びが成立すること等が明らかになり、本科目での取組に一定の有意義性を認めることができた。

【キーワード】対話的・協働的な学び、理論と実践の結びつき、共通必修科目、授業づくり、学級経営

1. 研究の目的

平成28年4月に佐賀大学大学院学校教育研究科（教職大学院）が開学した。学校教育学研究科では、学力問題への対応、特別支援やいじめ問題・不登校対応など多様な教育ニーズへの対応及び新たな学校づくりという地域の教育課題に対して、中心的な役割を担う高度な専門性と実践的指導力を備えた教員の養成をめざしている。

本研究科は、教育実践探究専攻の1専攻で構成し、専門的なコースとして授業実践探究コース・子ども支援探究コース・教育経営探究コースの3コースを設置している。カリキュラムは、各コースとも①目標設定確認科目・②共通必修科目・③教育実習科目・④コース専門科目・⑤目標達成確認科目で編成し、理論と実践の往還を原理として構造化している。

本稿の目的は、教育実践探究専攻の1年次共通必修科目「授業づくりと学級経営の基礎と課題」

(2016年度前学期)の取組を取り上げて、理論と実践の往還をめざした科目構成の意義を大学院生

の学習の変容を元に検証することである。

2. 研究の方法

本授業科目では、毎授業後に小レポートとして本時で学習した内容についての感想や意見をまとめさせている。また、学期末レポートの項目の中に自由記述で本授業科目の感想を書かせている。

まず、学期末レポートを手がかりとして大学院生がこの授業科目を通して何を学びとったのか、どのように学習を深めていったのかを考察する。次に、学部卒業と同時に大学院に進学したストリートマスター2名と地域の学校現場から派遣された大学院生2名に焦点を当てる（以下、それぞれ「一般院生」、「現職院生」と記す）。焦点を当てた大学院生の学びの実態を小レポートの分析により明らかにすることで、理論と実践の往還を図った本授業科目の有意義性を検証する。

3. 「授業づくりと学級経営の基礎と課題」の概要

本科目の目標は、授業づくりの基盤となる学級

^{*1}佐賀大学大学院学校教育学研究科 ^{*2}佐賀大学教育学部

経営及び授業づくりの基礎理論を理解し、事例研究を通して理論と実践を結びつけて考えることである。

本科目は3部構成となっている。第1部は小中高等学校における授業づくりと学級経営の基礎理論である。子どもの発達段階によって授業づくりもその基盤となる学級経営も変わるものもあれば不変のものもある。それぞれの学年に応じた集団づくりの方法や配慮する点、共通した点などについて学修する。第2部は、事例研究であり、小中高等学校で実際に取り組まれた授業づくりや学級経営について、その背景となる理論を検証する。第3部は実践的な探究である。幼小中高における授業参観や学級経営に関する実践的な取組を、第1部・第2部で学修した内容と照らし合わせることで理論と実践の往還を図る。

本授業ではアクティブ・ラーニングの要素を取り入れている。第1部では授業づくりと学級経営の基礎となるQU理論に関して、一般院生が調べてきたことを発表し、そのことについて全体で議論するという形で授業を進めた。第2部は現職院生が実際に自ら経験してきた授業づくりや学級経営についてまとめ、その背景となる理論を調べ発表した。その後、発表内容について議論した。各授業内容に関しては表1の通りである。

表1 「授業づくりと学級経営の基礎と課題」15回の内容

回	内容
1	オリエンテーション、『学級集団づくりのゼロ段階』第1章
2	『学級集団づくりのゼロ段階』第2章
3	『学級集団づくりのゼロ段階』第3～4章
4	『授業づくりのゼロ段階』第1章
5	『授業づくりのゼロ段階』第2～5章
6	「私の授業づくり／私の学級経営」実践研究発表①
7	「私の授業づくり／私の学級経営」実践研究発表②
8	「私の授業づくり／私の学級経営」実践研究発表③
9	「私の授業づくり／私の学級経営」実践研究発表④
10	中学校授業研究会および講話（特別活動） 場 所：附属中学校1年1組教室 指導者：附属中学校教諭
11	「私の授業づくり／私の学級経営」実践研究発表⑤

12	小学校授業研究会および講話（特別活動） 場 所：附属小学校5年2組教室 指導者：附属小学校教諭
13	高等学校授業研究会および講話（地理歴史科） 場 所：佐賀西高等学校302教室 講 師：佐賀西高等学校教諭
14	幼稚園保育研究会 講 師：附属幼稚園副園長
15	レポート発表会

4. 学期末レポートの分析

ここでは学期末に課したレポートの記述内容を分析する。

学期末レポートの課題は「授業で学修した成果と課題、感想を項目毎にまとめなさい。①QU理論（一般院生発表）、②事例研究（現職院生発表）、③授業参観及び講話、④授業全体を通して」と示し、回答形式はB4用紙に自由記述式とした。本課題の提示は第14回の授業終了時に行い、第15回の授業開始時まで書いてくるよう指示した。第15回の授業で、受講者は数人のグループ毎にレポートの口頭発表とグループディスカッションを行い、成果と課題の共有を図った。その後、担当教員がレポートを回収した。

以下では①～④の項目毎に受講者の記述内容の分析と考察を行う。分析にはSCAT法（大谷，2011）を活用した。SCAT法は小規模データの質的分析のために開発された方法であり、本稿における実践成果の検証という関心に適すると判断したためである。まず①～③について、コーディングの手法を援用して記述内容の量的分析を行った（4章の下線部はコードを示す）。次に④について、ストーリーラインを作成し①～③の分析が妥当であることを確認し、考察を行った。

4. 1. 「QU理論の演習発表」の分析

〈QUの認知〉

学期末レポートの記述からわかる範囲では、QU理論を初めて知ったのは6名、QU検査の実施経験有りは4名であった。記述内容では、QUの

概要に言及したのが12名、QUの意義に触れたのが8名、QUの限界や課題を挙げたのが7名であった。

表2 「QU理論の演習発表」の主な記述

コード	一般	現職	計
初めて知った	5	1	6
実施経験有り	0	4	4
QUの概要	8	4	12
QUの意義	5	3	8
QUの限界や課題	5	2	7
反省し課題を把握した	0	6	6
自信や裏付けを得た	0	5	5
学べてよかった	3	0	3
応用を志向	11	10	21

〈QUの実践経験の有無と学んだ内容の関係〉

佐賀県では小中学校を中心にQU検査を実施している学校が多く、現職院生のほとんどはQU理論を認知していた。その経験を踏まえ、現職院生の6名はこれまでの活用を反省し自己の課題を把握した。また現職院生の5名は、学びとったQU理論の概要を踏まえて「自分がこれまで実践してきたことは間違いではなかった」というように自己の実践に自信や裏付けを得た。

これに対して、一般院生は、初めて知るQU理論を吸収しようとし、その概要や意義・課題を学んだ。一般院生の1人は学部時代の教育実習のことを振り返り、「(教育実習は)3週間という短い期間であることや、どちらかという授業づくりに力を入れていたため、正直学級経営について多くのことを学べたという実感はなかった。しかし、今回の発表を通して、学級経営を理論から学んだことにより、以前よりも学級経営のイメージを持つことができた」と述べた。学部4年間で学び残したことをもとに本講義の成果を捉えていることがわかる。教職大学院における一般院生の到達目標を考えると、このような声を生かして講義内容を構築することは重要であろう。

現職院生の1人は、「QUテストの内容自体をやっていない人にとってはわかりにくく、ポイントについても実践レベルで具体的にどうすればよ

いかという点においては、『学級集団づくりのゼロ段階』の本は説明がたりない部分も多かったように感じた」と懸念を述べた。しかし、QUに初めて接した一般院生は、むしろQU理論の学習を肯定的に評価した。一般院生の3名は「QU理論について学べてよかった」と述べた。これは、現職院生とのグループディスカッションがあったことや、本科目の第2部で現職院生の事例研究に接したことが肯定的に作用したと考えられる。たとえば一般院生の1人は、QUの「活用の仕方や、現場での実際についてディスカッションを行うことで、自分がQUの理論を教師となった際にどう活用していくのかについて、より考えを深めることができた」と述べた。

〈実践への応用志向〉

すべての受講者が、この項目の学習成果をもとに今後の学級経営や授業実践への応用を志向していると判断される(全21名)。キーワードを抽出して整理すると、(1)QU理論に基づき学級経営を見直す(一般1/現職5)、(2)自身の教育観や指導方針を再構築する(一般3/現職1)、(3)QU理論を実践現場で活用する(一般3/現職0)、(4)QU理論を生かした実践方法を考案する(一般2/現職0)、(5)QU理論を教科の授業づくりに生かす(一般1/現職1)、(6)教師としての成長をめざす(一般1/現職1)、(7)立ち返るべき理論の一つとして同僚に教示する(一般0/現職2)ことを志向している。

〈教材としてのQU理論の意義〉

QU理論の学習は、一般院生にとっては、学級集団を育てる方法の一つを学び、自身の教育観や学級経営を考究する機会となった。また現職院生にとっては、これまでの自身の学級経営の成果や課題を明らかにし今後の改善方針を立てる機会となった。このほかにも、学級経営に困ったときにQU理論に立ち返ったり同僚に教示したりする、QU理論の考え方に学んで教師としての資質を伸ばすなど、学習成果は多岐にわたった。

このように受講者はQU理論の考え方をそれぞれの既有知識、実践経験、問題意識のもとに受けとめ、吸収したといえる。そして、グループディ

スカッションによって未経験の部分を補ったり、学級経営の改善策を考えたりするなどの対話的で互恵的な学びが生み出されたのである。

本授業のように、背景や立場の異なる様々な受講者を対象とする講義においては、そのちがいを架橋することのできる学習テーマから議論を出発すること、いわば「思考の礎石」を用意する必要があると思われる。QU理論は、学級づくりや授業づくりをルールとリレーションの2軸から捉えるという、受講者にとって分かりやすい見立てを有することから、教職大学院の授業科目におけるそうした礎石の一つとなると考えられる。

4. 2. 「現職院生による事例研究発表」の分析

表3 「現職院生による事例研究発表」の主な記述

コード	一般	現職	計
子どもへの愛情, 教育信念	7	6	13
授業づくりや学級経営の参考	5	3	8
QU活用の実事例	4	3	7
失敗事例の発表の意義	3	2	5
一般院生にとっての有意義	0	3	3
理論と実践の関係, 理論を学ぶ意義	4	4	8

〈事例研究発表で得たこと〉

現職院生 10 名による各事例研究発表から受講者は何を学んだのか。学期末レポートの記述によれば、「子どもへの愛情, 教育信念, 個性的な実践の様子が伝わってきた」が13名、「授業づくりや学級経営の参考になったので今後実践してみたい」が8名、「QU活用の実事例の発表が参考になった」が7名であった。

〈QU理論の実践編〉

とくにQU調査の実施経験が浅い受講者にとって、事例研究発表はQU理論の実践編として受けとめられた。たとえば、一般院生の1人は「講義の中心であったQU理論と現職の先生方の事例を照らし合わせてみると、すべての子どもを満足群にすることは非常に難しいことがわかった」と考察している。事例研究発表においては、様々な理論から自分の関心に応じたものを取り上げることとなっていたが、結果として発表者の多くがQU

調査の経験を報告したことで、理論と実践の結びつきが生まれたといえる。

〈失敗事例の報告の意義〉

事例研究においては、思うような学級経営ができなかった経験、いわば失敗事例についての発表もあった。受講者の5名はその発表に言及し、「現職の方々が、「失敗した」「駄目だった」と言われていたことは決してマイナスではなく、日々考え悩み抜きながら行われたことであるから、その点も尊重すべきである」(一般院生)、「うまくいかなかった事例も提示されたことは大変良かったと思う。学級経営なんて何年もしたからといってうまくいくわけではなく、毎年子どもの実態に合わせて担任教師が工夫しながら関わっていかねばならないと改めて感じる事ができた」(現職院生)など、失敗事例の発表の意義を述べた。どちらも、事例研究から学級経営の方法を表面的に受けとめるのではなく、学級経営のむずかしさを深いレベルで理解しているといえる。

このように、第1部で教授した思考の礎石を踏まえつつ、現職院生が実践事例(失敗事例を含む)を検証し発表することにより、受講者に深い学びが生み出されると考えられる。

〈「後輩」を育て「同僚性」を育む場〉

現職院生の3名は、事例研究発表は一般院生にとって有意義なものだっただろうと述べている。たとえば、「あまり他の人には言いたくないような内容も発表で話してくださった方がいらっしゃったが、ストレートマスターにとっては貴重な内容だったと思うので、ぜひ参考にしていってもらいたい」、「特に異校種の先生の取り組み(中略=引用者)は、現職の私だけではなく、ストレートマスターにも大変刺激的だったと感じた」という記述がみられる。

このように、事例研究発表は現職院生にとって、みずからの実践を省察し体系化するのみならず、これから「後輩」となる一般院生を育てる場としても意識されているといえる。その意識は、大学院に学びにきた院生の立場であるとはいえ、これまで同僚の先生方との関係性のなかで働いてきた

現職院生にとって自然なものであろう。もちろん、現職院生は一般院生の「教師」ではない。しかし、先輩と後輩の間で学び合う「同僚性」を構築する一助として事例研究発表を意義づけることはできるであろうし、それが現職院生と一般院生が教職大学院でともに学ぶ意味の一つでもあると考えられる。言い換えれば、一般院生と現職院生の立場や経験のちがいは、対話的で互恵的な学びの源泉となるのである。

〈理論と実践の関係を問うこと〉

事例研究発表を通して、受講者の8名は、理論と実践の関係を問うたり理論を学ぶ意義を考えたりした。その内容を詳しく見ると、(1)理論に対する実践の有効性（実践例が加わると理論に説得力が加わる等）、(2)実践に対する理論の有効性（理論に立ち返ることで実践に自信をもてる等）、(3)理論と実践の関係付け（実践が先か理論が先か等）、(4)理論の危うさ（方法論のシステム化による実践の形骸化）、(5)今後学びたい理論の5項目が挙げられる。

たとえば、一般院生の1人は「今まで理論とか考えたことがない、自分の直観でやってきた」というある先生（＝現職院生）の言葉がとても印象に残りました。現場では、常に子どもと向き合い、子どものために自分が何ができるのかということを考えていることは、理論など関係ないかもしれないけど、理論に立ち返ることによって、実践に自信を持ったり、より良くしていったりすることができるだろう」と書いた。現職院生の声を受けとめたうえで理論の意義を考えているといえる。また、現職院生の1人は「自分の学級経営の失敗と立て直しを振り返ってみて、本から織物モデルというものを知り、理論化できた経験が大きな成果であった」と書いた。発表資料作成を通して自己の実践を省察したことに学習の成果を見出していることがわかる。

このように、受講者は事例研究発表を通して、教育実践研究における理論の意義や、理論と実践の関係性を問い深めることができた。これは、理論と実践の往還をめざした本科目にとって重要な

成果であるといえるだろう。

4. 3. 「授業参観及び講話」の分析

表4 「授業参観及び講話」の主な記述

コード	一般	現職	計
学び得たことの概要を学校毎に	5	8	13
高校の授業参観や講話を中心に	7	0	7
担当教諭の教育観や願い	6	2	8
授業づくりや指導技術	5	0	0
学級経営について	1	2	3
他校種の授業、異校種連携	5	4	9

〈授業参観や講話で得たこと〉

幼稚園、小学校、中学校、高等学校各校の教諭による講話と授業から受講者は何を学んだのか。学期末レポートの記述は、学び得たことの概要を学校毎に記した13名と、高校の授業参観や講話を中心に述べた7名に大きく分かれた。言及された内容を整理すると、担当教諭の教育観や願いについて(8名)、授業づくりや指導技術について(5名)、学級経営について(3名)等がみられる。

〈教科の本質を踏まえた授業づくり〉

受講者の多くが、佐賀西高等学校で地理歴史科の授業と講話を担当して下さったT教諭の教育観の深さ、授業構想の緻密さ、指導技術の巧みさに言及した。一般院生の1人は、「高校の授業では、教科の本質について考えた。とことん復習させ話し合いをさせる授業スタイルや、歴史から現代を考えさせるような本質的な問いからは、「生徒に思考させたい」というT先生の強い思いを感じた」とし、自分の専攻教科にあてはめて考えを深めることができた。

この院生に代表されるように、教科の授業を学びたいという声は少なくない。教科の本質や存在基盤を追究する動きが高まるなかで（角屋重樹，2015）、受講者のなかにも「なぜその教科を教えるのか」を問題意識としていた者が少なくなかったであろう。また、小学校・中学校の参観授業が「特別活動」であったことから、教科の授業から学びたいという意欲が高まっていたのではないかと思われる。教科の授業参観を増やすなど、こう

したニーズに応じていくことが今後の課題といえよう。

〈他校種に学ぶ機会〉

院生の9名は、4校の授業参観や講話を踏まえ、自分の志望校種や勤務校とは異なる校種（以下、他校種）の授業の様子を知る意義や異校種間連携の重要性を述べた。たとえば現職院生の1人は、幼稚園教諭の講話に触れながら、「小学校と幼稚園教育の目的・目標の違いを明確に捉えられたこと、また、その目的・目標の達成のために採られている方策や支援の実際を知ることができたことは、大変有意義であった」と書いた。同様の結果は、第2部の事例研究発表の記述にも見られ、6名（一般2/現職4）が「他校種の取組から学ぶことが多かった」と書いた。

このことから、「他校種の取組」や「異校種間連携」といったテーマは、立場や勤務経験の異なる受講者を対象とする本科目における有効な題材の一つとして意義づけることができよう。

一方で、現職院生のなかには「今回の授業参観は比較的優秀な生徒集団での指導であり、一般校でどれだけ活かすことができるのか」、「模範授業として観察すべきか批評授業として検討すべきか悩んだ」など、豊富な現職経験ゆえに学びが限定的になっている傾向も複数名の記述から窺えた。現職院生にとって有意義な授業参観のあり方を検討することも今後の課題となろう。

4. 4. 「授業全体を通して」の分析

最後に、④の記述内容を分析して生成したストーリーラインを示す。ストーリーラインは4ステップのコーディングから生成したコードをストーリー化したものである。

資料1 「授業全体を通して」の分析に基づくストーリーライン

授業科目「授業づくりと学級経営の基礎と課題」において、受講者はQU理論の学習を通して学校教育活動の要としての学級経営の役割に注目し、質の高い学級経営が質の高い授業を生み出すという学級づくり－授業づくり連関論の視点を身につけた。また、リアルな実践の説得力に満ちた現職院生の事例研究発表に学ぶこ

とによりQU調査の意義の再評価を行い、子どものニーズの把握に基づく学級経営手法の拡充への意欲をもった。小中学校と比べると高校における教師主導型授業の傾向は根強いものがあるが、その課題に対して学級経営からの見直しの可能性も示唆された。とくに一般院生は、学部で学び残した学級経営論を学び直し、生き生きとした学級経営のイメージを持った。

現職院生による事例研究発表は、現職院生にとっては他者の試みを取り入れて成長する場となり、教師主導型を見直すチェック機能として児童生徒による評価を取り入れたい、新しい教育方法への柔軟さをもち理論で裏を取った実践を構想したい、自信をもった実践を行い学習指導の説明責任を果たしたいなど、自己の実践課題を明確化することができた。また一般院生にとっては、みずからの実践を生き生きと語る現職教員の姿を見ることで、教師の資質の一つとしての指導方針一貫性－子どもの信頼連関論に気づく機会となり、実践上の悩みやコツを同僚と話し合うことを大切にする抱え込まない教師像をもち、同僚性の基礎を育む場となった。

幼・小・中・高における授業及び講話は、いずれも学習の主体者としての子どもや教科の本質に根ざした指導を重視するものであった。参観を通して受講者は目標設定の重要性に気づくとともに、教師よりも子どもの学びに焦点を当てた授業分析を重視する学習指導の子ども論的転回の意義を知るに至った。また、他校種の様子を参観することにより、各校種の専門性の尊重の考えに立ちつつ校種間接続の円滑化の意義を理解し幼稚園から高校までの見直しをもって実践に当たろうとしている。

本授業は、教科指導や学級経営の理論を詳しく聞きたいという理論教授のニーズを満たしきれなかったことに課題は残るものの、QU理論の学習や事例研究、授業参観等を通して理論と実践の相互補完が営まれており、一般院生と現職院生の立場の違いが生きる教育プログラムであったといえる。

課題として挙げられた「理論教授のニーズ」には、3名の院生（一般1/現職2）が言及した。たとえば「授業について欲を言えば、院生の発表が中心になっていましたが、もう少し学級経営のあ

り方や理論についてM先生やN先生からご教示いただけたら、さらに専門性を高められたかなと思います」などがある。こうした実態を踏まえ、演習型授業と講義型授業のバランスを再考すること、特に授業づくりや学級経営の基礎原理について担当教員による講義型授業を効果的に取り入れることが求められると考える。

このような課題は残るものの、QU理論、事例研究発表、授業参観及び講話とディスカッションを組み合わせて行われた本授業科目の成果は、とくに「質の高い学級経営」と「教科の本質に根ざした指導」を両軸として受講者相互の立場や背景のちがいを架橋する対話を促したことにあると考えられる。このことは、4. 1～4. 3の分析結果とも合致するものである。

4. 5. まとめ

学期末レポートから明らかになった本授業科目に関する知見と課題を以下にまとめる。

〈知見〉

- (1) 講義内容には、一般院生が学部4年間で学び残したと感じていることを含めることが有効である。
- (2) 一般院生と現職院生の立場や経験のちがいは、対話的で互恵的な学びの源泉となる。
- (3) 対話的で互恵的な学びをつくり出すには、受講者の背景や立場のちがいを架橋することのできる鍵概念＝思考の礎石を設定することが効果的である。
- (4) 現職院生による事例研究発表（失敗事例を含む）やディスカッションは、方法論の表面的な理解にとどまらない深い学びの機会となるとともに、学校現場における「同僚性」を育む機会として意義づけられる。
- (5) 「QU理論」は、学級集団づくり、授業づくり、ルールとリレーションといった学校教育を横断する論点を扱うことから、本科目におけるすぐれた教材性を有する。
- (6) 「他校種の取組」や「異校種間連携」は、本科目における有効な題材となる。

〈今後の課題〉

- (7) 講義内容における「授業づくり」と「学級経営」のバランスを再考し、教科指導の専門性を高めるための内容を増補する。
- (8) 授業づくりや学級経営の基礎原理に関する講義型授業を効果的に取り入れる。
- (9) 現職院生にとって有意義な授業参観のあり方を明らかにする。

5. 大学院生の学習の分析

以下では、一般院生2名及び現職院生2名を抽出し、小レポートの内容を分析する。なお、以下の第○回は3章の表1に示す授業の回数を表している。（下線、番号、省略は引用者による。）

5. 1. 一般院生Pのレポートの内容とその考察

資料2 一般院生Pのレポートの内容

第2回

学級経営については小学校のイメージが強かったのですが席替え・班替えなどの意図を持って行うことが大事だなと思いました。自分のやり方がクラスに合っているかなどを知る方法を多く見つけたいと思います。（後略）

第3回

（前略）一日中学級の生徒を見ることはできないので、①学年団で協力してルール作りや雰囲気作りをすることも中高では欠かせないなと思いました。今まで生徒の立場で見てきた学級経営を教師の立場で考えるとなかなかイメージできないことも多くありました。もっと現職の先生の実践例を聞いてみたいと思いました。

第4回

②受け持つ集団、学級の子も達としっかり向き合うことが一番大切ではないかと思いました。経験が長くなれば自分のスタイルのようなものもできるだろうし、子ども達も教師に合わせる部分もあるかもしれません。（中略）③自分の癖はなかなか見えないので、他の人に意見をもらって自己理解を深めていけたらなと思います。

第5回

③今まで4回の講義を通して、理論はすごくよく

分かったけれど、そのときの様々な状況に応じて柔軟に対応していくことが大切であると思いました。

教師がぶれずに一貫していることや子どもたちとほどよい距離感を保つことはどんな集団においても通ずるところなので念頭に置いて子どもたちに向き合っていくべきだなと感じました。(後略)

第6回

A先生、B先生それぞれの実践が知れて、実際使われているものであったり、④手段が明確に見られたりするので、理論に具体性が増したなと思いました。特にストマスが4回かけて発表した河村先生の理論についてあまりぴんとくるものがなく、何となく抽象的なイメージが強かったので「こういう活動がこの理論の部分に当たるんだ」ということが何度もあり面白かったです。(後略)

第7回

⑤C先生の話の後半に実際に行ったQUの結果を提示されている部分があって、前回よりもQUをする理由みたいなものがわかった気がする。すべてをとらえられはしないけれど、なかなか表面に現れてこない生徒の変化や自分の反省点に気づくことのできるツールであるなと思った。(後略)

第8回

(前略) ⑥やっぱり目の前の子どもたちに何が必要かそこで考えて適した対応をすることが教師として一番大切なんだろうなと思いました。マニュアルなんてやっぱりないですね。⑦F先生の発表では初めてシグマ検査というものが出てきて、QU理論ばかりだったので、この検査についてもっと知りたいなと思いました。理論だけを聞いてもなかなかどんなものかイメージすることができないので是非この検査をして、クラスがどうであったかなどの生徒の実態についての話も聞きたいなと思いました。

第9回

(前略) 現職の先生たちと学んでいく中で、その先生がどんな人であるかを知って、今すごく親しみがあるのですが、きっと教師と先生の立場であれば関係がうまくいかなかったらと思うこともあります。⑧同じ学生として学んでいるからこそ、話せること聞けること学べることが多くあると思うの

で、発表されたことだけでなく、もっと色々知りたいと思います。私も何かストマスももちろん先生たちもプラスとなるようなことができるよう意識していきたいです。

第11回

(前略) 失敗した経験なんてキャリアを積むほど話したくないことだと思います。でも本には成功するための方法しか書いてないことも多いので本当にありがたいなと思います。⑨なぜうまく立て直すことができたのか。もちろん理論も気づかないうちにたくさんあったとは思いますが、やはり子どもたちにまっすぐ向き合う姿勢があったからだろうなと思います。私はまだ生徒の立場で現職の先生を見てしまうこともあります。悩まれているとき、怒られているときほど本心で話されているなど常々思っています。(後略)

第12～14回(学期末レポートより*)

(前略) ⑩幼稚園も小学校も中学校も高校もなにかの準備段階ではなく、その成長の過程で身につけるべき知識や能力を習得する段階、体験して経験を積む時期。ピラミッドではなくパズルのピースのイメージで、上下関係なく、中学校の先生が小学校の先生に要望ではなく「こういう考え方を付けさせたいですね～」というふうに話ができればもっと接続がうまくいって、子どもたちの戸惑いや不適応も減るかもしれないなと思いました。

学年末レポート(授業全体を通して)

(前略) ⑪理論を学び、経験談を聞いて、自分の中に知識や情報を蓄積しておくことは大切だけれど、それは必要なときに引き出せるようにしておいて、頭でっかちにならずに子どもたちと正面から向きあって、うまくいくかどうかはわからない中でも、そのままの姿をまずは受けとめる姿勢を忘れず、大切にしていきたいと思いました。

〈一般院生Pのレポート内容の考察〉

最初のQU理論の学習に関してはQU理論とは何かを理解し、それがどのように実践と結びつくのか自分の経験と重ねたり、授業中の班別討議で現職院生等と議論したりしている。しかし、理論と実践の結びつきが弱く、理論の理解も漠然とし

ている段階といえよう（下線①③）。

次に、事例研究を通してQU理論が実践とどのように結びついているのかを知り、その有用性や課題について述べている。現職院生がQU理論を元にこれまでの学級経営を振り返り発表したものが多かったため、学習してきたQUがどのように活用されるのか考えることができたのであろう。

QU理論の学習が思考の礎石となっている（下線④⑤⑩）。さらに、シグマ検査など他の理論にも目を向けたり、理論や経験は重要であるが、それ以上に子どもに真摯に向き合う教師として不可欠な姿勢について言及したりしている（下線②⑥⑦⑨）。

授業参観や講話を通して、子どもの成長を全体的にとらえ視野の広がりを感じられる（下線⑩）。

第9回の「私も何かストマスももちろん先生たちもプラスとなるようなことができるよう意識していきたい」という記述から、授業を重ねる中で現職院生に対する同僚性の意識が芽生えている（下線⑧）。

5. 2. 一般院生Qのレポートの内容とその考察

資料3 一般院生Qのレポートの内容

第2回

（前略）ストマスの身分としてはもっと先生たちの話が聞きたいし、新たな視点を増やしたいと思います。

第3回

（前略）①学級経営はいろんな要素が関係し合って行われるものであり、個が集まった一つの集団として生き物のように思えます。今回の学びをベースに授業の姿から、子どもの姿から学級経営を見つめていけたらと思いました。

第4回

（前略）グループ内で「教師のコーディネーター」という言葉が出てきましたが、自分自身を振り返るときの視点というのも一つではなく、様々な視点があるのだと思います。②教育実習の時にもらった資料にあったと思うので、復習をかねて読み直してみます。

第5回

（前略）③これまでの学生生活で私はゆるみ→荒れ始

めの学級を多く経験してきたように思います。振り返ってみると、担任の先生、教科担当の先生に信頼感がもてなかった気がします。これまでは思い出に終わっていましたが、これからは「なぜだったのか」を考えていく必要があるのだと思いました。

第6回

④「子どもの主体性・自主性」という言葉が理想の学級経営をかたる上でよく出てきますが、やはりその実現のためには様々な方法があるのだと、生の声を聞きながら改めて思ったところです。環境を整える、仕掛けを工夫する、・・・たくさんの方法があり、色んな子どもがいるからこそクラスの色があるのだと思いました。

第7回

先生方の発表には子どもたちへの愛情があふれていたように思います。やはり何よりも大切にすべきなのは子どもという存在であって、⑤いくら理論を積み重ねても「理論」だけで「教育」という行為は話せないと思いました。しかし、C先生の言葉にあったようにQUの結果にとらわれすぎてもいけないし、だからといって無視していいというものではない。N先生から「気づいたらこういう実践になっていた」というバックボーン確立。この領域まで来た実践はきっとすばらしいものになるのだと感じました。

第8回

（前略）⑥子ども一人一人の笑顔を大切にしたい。この思いは誰もが持っているものであって、私の中でも低位の子や家庭に問題を抱えている子への思いが強く出がちだと自覚しています。ただそのとき、30人強の学級を守るため、その子を守るため私はどう動いていけるのだろうかと自問自答しています。まだ軸がぐらぐらしていると反省も胸に、今日の発表を受け止めたいと思いました。

第9回

今日お二人の話を聞いて、両先生とも自分のスタイルを持ってあって、かつこいいなと思いました。⑦先生になる前にあまり考えすぎるのはよくないと思いますが、ネタ集めをしておくのに早すぎることはないので、授業以外の場面でも先生方にお話を伺

ってみたいと思います。先生がぶれない何かを持っているとそれは子どもや保護者からの信頼となって返ってくるのではないのでしょうか。新採の友人と会ったとき彼らなりのスタイルを聞いてみたくなりました。

第11回

(前略) ⑧小学校の先生方が他クラスの先生と連携しているイメージがなかなか持てなかったのですが、グループにいらっしやった現職の先生いわく「数年前からそういう雰囲気になってきた」ということで安心しました。子どもを愛する気持ちはきっと共通事項だと思います。校種や地域が異なっても。

第12～14回(学期末レポートより)(省略)

学年末レポート(授業全体を通して)

⑨講義の中で理論と実践の「統合」という言葉があった。これは現場に出た私たちが特に意識しなければならぬ(ある意味求められている)ものだと考える。私はこれまでの学生時代を振り返り、よく思い出話風に、荒れ始めの集団の経験話を話していた。しかし、それだけでは何の学びにもならなかったのである。「なぜあのような授業風景だったのだろう」「先生はどのように働きかけられていたのだろうか」「ルールやリレーションは確立していたか」……このあたりの問いを、思い出として残っている記憶に語りかけなければならなかったのだ。⑩よく現場に出た先輩、同級生から「大学で学んだことなんて、何も役立たない」と聞く。しかし、これはきっと間違っている。どこかで大学で学んだ理論に支えられた実践をしているはずであり、気づいていないだけなのだと思う。もしくは何らかの理論に通じた実践方法を先輩から学んでいたり、自然と実践したりしているだけなのだ考える。完璧ではないが1つのゆるぎない形である理論は、あらゆる実践において軸となり、自信となるものだ。今はまだ「統合」できる理論の引き出しを増やすことに努めたい。

〈一般院生Qのレポート内容の考察〉

QU理論に関しては、ルールとリレーションというQU理論の核となる考え方に着目して感想を述べるのではなく、教師にとって必要なことは何かについて自身を振り返りながら言及したものと

なっている。この時点では理論と実践を結びつけるような記述はほとんど見られない(下線①②③)。

次に事例研究を通して、現職院生の発表から理論を求めるといよりは教師としての姿勢に学び、教師になった際の自分自身と重ねて文章を書いているのがほとんどである(下線④⑥⑦⑧)。その中で、第7回の「QUの結果にとらわれすぎてもいけないし、だからといって無視していいというものではない。N先生から「気づいたらこういう実践になっていた」というバックボーン的确立」(下線⑤)という記述は実践の背景となる理論の重要性について述べている(下線⑧⑨)。このことは学年末レポートの「完璧ではないが1つのゆるぎない形である理論は、あらゆる実践において軸となり、自信となるものだ。今はまだ「統合」できる理論の引き出しを増やすことに努めたい」と言うまとめにつながっている(下線⑩)。自身の経験や将来と重ねた感想が多かったが、全15回の授業を通してみれば、理論と実践の往還の重要性を意識するようになったと考えられる。

5. 3. 現職院生Rのレポートの内容とその考察

資料4 現職院生Rのレポートの内容

第2回

(前略) ①授業の中で出たように内容をとてもわかりやすく今まで自分がやってきたことってこれなんだなあと確認することができた。(理論づけられたとの言葉もありましたが) (後略)

第3回

(前略) ゆるみやかたさの見られる集団についての指導についてのディスカッションをしましたが、話をする中で、発達段階によっても違うなと感じました。②ストマスと話し合うことで、理論だけでなく実践的な話も出ました。もちろん自分の実践が正しいと思っているわけじゃないので、参考程度になればいいなと思っています。お互い勉強になる部分が多くてよかったです。

第4回

(前略) いつものことだが小中高によって対応の仕方も違うし、③時期や児童の特性やクラスの雰囲気、

教師との信頼関係で変わってくる。日々そういうことを深く考えずに目の前の子どもたちが案外感覚的なところで色々な面を考えていたんだなあと改めて感じた。(後略)

第5回

④今日は授業づくりということだったが、あまりよく分からなかった。ディスカッションも含めて授業をどう深めていくかということについてもう少し詳しく知りたかった。後の発表にもあったように学級集団を見取るにはやはり教師の力が大きいと思う。(中略) Q Uでは子どもたちの意識と教師の看取りを発見できたり、自分の見方を確認できたりするので学級集団を客観的に見られると思う。(後略)

第6回

(前略) 自分が発表する立場にもなるので難しいと感じることは学級経営と授業づくりとした大きなテーマなので、どこまで話をするのかということだ。
⑤前回までの0段階についての話とあまりにもかけ離れてしまうとストマスの人たちにとっては話を聞くだけで終わってしまうのではないだろうかと思発表の準備をしながら悩んでいる。

第7回

(前略) ⑥校種によっても学級経営に関する取組が違っててすごく興味深いものだった。小学校では担任がすべてなので毎年自分のクラスにどっぷりはまった学級づくりをしているが、高校では副担任もいて教科毎に教師も違うので難しい部分もあるのではないかと思った。また、担任か副担任によっても関わり方が違うということがよくわかった。(後略)

第8回

(前略) 崩壊した自分のクラスのことを話すのはとても勇気があることだと思う。しかし、今日のようなクラスもないことはないのでストマスにとってはとても有意義な発表だったと思う。また⑦現職の私にとってもこれまでの経験に頼りすぎてというのがとても参考になった。目の前の子どもたちの状態をQ Uは客観的な資料として役立つのだと改めて思った。次にF先生の発表について、小学校でしか学級経営という言葉が出ないと知り驚いた。⑧確かに中高では教科担任制となるので、学級集団づくりに

ついては小学校と異なる部分も多いと思う。シグマ検査やスタディーサポートなど、色々な検査があることを知れてよかった。

第9回

⑨今日は発表者だったのでとても緊張しました。が、発表することによって、今までの実践を整理することができました。(後略)

第11回

⑩今日2人の発表は中学校ということで小学校よりも切実な問題があるなど感じた。と同時にやはり小学校では子どもたちのつながりを大事にしておく必要があるのではないかと思った。いつも子どもたちには「先生は今年1年しか一緒にいないけど、みんなはこれからも同じ学年で過ごしていく。困ったときに助け合えるのはみんなだよ。」と言うが、今日の発表を聞くとまさに集団として子どもたちが変わっていているような気がした。⑪これまでの授業で色々な発表を聞いて結局「リレーション」とか「コミュニケーション力」というのが重要だと思う。今後学級経営にとっても参考になる話が毎回聞けてよかった。

第12～14回(学期末レポートより)

(前略) 附属幼稚園(講話) …⑫9月の実習に向けて何度も幼稚園へ行ったりU先生の話を聞いたりしているので、「作らない保育」というのがなんとなくわかってきた。幼稚園に行くようになって「子どもの自律性を育てるとはどういうことか」「小学校でやりすぎていないか」を考えるようになってきた。

学年末レポート(授業全体を通して)

いろいろな発表を聞いたり授業を参観したりして、やはり学級経営が1番大切だと思った。(中略) ⑬学級経営の基本は授業で出てきたように「リレーション」と「ルール」だと思う。リレーションも「教師-児童」「児童-児童」「教師-保護者」があり、この3つがバランスよく成立していなければならないと思った。モンスターペアレントと言われる人も、「自分の子どものことが大切だから当たり前」と思うことができるようになってからは対応もそう苦になることはなくなってきた。また⑭幼稚園～高校の先生の授業を見たり話を聞いたりして、小学校ではどう

あるべきかということを考えるようになったのが大きな成果ではないかと考える。幼稚園からどうつなぎ、中学校高等学校へどうつなげていかなどということは今まで意識していなかったが、現場に戻ったときにそういうことも意識して学級づくり・授業づくりをしていきたいと思う。

〈現職院生Rのレポート内容の考察〉

現職院生Rは小学校の先生であり、QU理論の学習で新たに理論を学ぶというよりは自分の実践を振り返り、それが理論づけられたと考えている(下線①⑨)。QU理論に基づいた授業づくりに対してはそれが授業を深めるものとなっていないという指摘をしている(下線④)。事例研究で他校種の発表や幼小中高の授業参観及び講話を聴くことで幼小中高を通した教育の中で小学校はどうあるべきかを考えるようになったのが大きな成果であると述べている(下線⑥⑧⑩⑫⑭)。また、「学級経営の基本は授業で出てきたように「リレーション」と「ルール」だと思う。リレーションも「教師－児童」「児童－児童」「教師－保護者」があり、この3つがバランスよく成立していなければならないと思った」と学期末レポートの中に記述しており、経験に頼りすぎるのではなく客観的に分析することの重要性について触れ、QU理論に結びつけて考察し、それが思考の礎石となり実践を体系づけている(下線③⑦⑪⑬)。一般院生に向けた文章が数カ所見られ同僚性を意識している(下線②⑤)。

5. 4. 現職院生Sのレポートの内容とその考察

資料5 現職院生Sのレポートの内容

第2回

(前略) 自分は高校で働いていますが、学級経営についてはクラスの担任ではなく、クラスの担当的な要素が大きく、細かいところまで把握していないように感じました。①高校では担当教科的な要素が大きい部分もあるが、理論的にしっかり学び、還元できる部分もあるので実践していきたい。

第3回

学級経営についてかたさとゆるみの集団どちらが

よいかについて考える機会になりました。②これまでの経験では4月から優しく生徒に接しているだけであれば、1年間ちょっとルーズなクラスができていたように感じます。4月のはじめはある程度厳しく接し、クラス活動などを通して生徒との距離を縮めていく方が3学期時にはある程度まとまりのある集団ができたように感じます。一番生徒に近い存在である担任が一貫した方向性を持ってクラス経営に当たり学年間の連絡を取りながら運営しなければならないと感じました。

第4回

③授業中にマンガを読んでいる子どもの対応についてのグループディスカッションで校種により対応が異なることがあり、特に小学校の先生の対応を聞くことができよかった。これまで自分自身はマンガであればすぐに取り上げ1週間程度預かり返却していた。(中略)クラスづくりや授業づくりは学校生活を送る上での基本となるものなので、教師自身がぶれず、ほどよい距離を保ちながらクラス経営をしていきたい。

第5回

学級集団に応じた有効な指導方法や有効な授業の構成、効果的な展開の中で1日の状態(朝の1限目と昼休み後の5限目)でも同じクラスでも違う雰囲気を感じる場面がある。よく目上の先生方からは「引き出しを多くしなさい。」と言われることがあったが、④自分の知識以外の部分、授業の方法や展開などもその場に応じた対応が必要になると感じました。また、自分の癖を知るためにビデオなどで撮影し、板書や発言などの振り返る時間も授業のスキルを上げていくために必要だと感じました。

第6回

(前略) ⑤小学校の先生ということもあり、とても学級経営を大事にされていることが分かりました。高校でも学級経営をやりますが、ここまで子どもと関わることがないので参考になりました。M先生が言われたように高校でも共通しているものを探し、発表につなげたい。

第7回

(前略) ⑥「クラス経営を行うための1つのツール」

としてQUを用いていることが印象に残った。この子はこの場所だから大丈夫であろうとはせず、常に子どもたちの変化を見極め、対応することにより、1年後に結果が出るだろうと改めて感じました。

第8回

(前略) ⑦これまで検査などのデータを見るときにはその結果のみに注目してしまい、その本質やなぜその部分と結びつくのかまでは気にすることはなかったです。データに隠された部分を見ることにより、本質的な部分に関心がいくように自分自身の考えを改めたい。

第9回

(前略) G先生は週1回席替えをされており、私自身は年2回程度だったので、席替えの定義や理論があれば知りたいと思いました。また⑧QUを用いてチェックした児童に個別に話を聞き、素早い対応は必要だと思いました。(後略)

第11回

(前略) ⑨まずI先生の発表の中に支持的風土の確立があり、それがセルフエスティームの向上につながるとありました。私も生徒指導に関わったことがあります。どうしても対処的生徒指導になりがちだったので、これからは開発的生徒指導の観点も取り入れていきたい。次にJ先生の方では隠れたカリキュラムという言葉は初めて聞きました。しかし、生徒指導の上ではとても重要であることを知り、自分自身も学んでいきたいです。

第12～14回(学期末レポートより) (省略)

学年末レポート(授業全体を通して)

⑩QU理論から現職の方の実際のクラス経営、幼稚園から高校までの先生の授業参観や講話などがあり、今後、クラス経営をすることができれば取り入れたい内容があり、とても勉強になりました。これまでのクラス経営は集団ではなく、個に重点を置いていたように感じます。小・中学校の先生方のように集団をより良い方向にもっていきつつ、個の指導もできれば、どのような相乗効果が出てくるか楽しみです。私の学校では数年前にQUを取りやめてシグマ検査になりましたが、年1回の検査ではなく年2回QUを実施することにより、もっ

とデータを有効活用することができたのではないかと考えています。目指す生徒像を実現するためには、効果的に担任が生徒と関わり、そのプロセスにより社会性や学習意欲を育むことができると考えるので、この経験を活かした現場で様々なことに取り組んでいきたいです。

〈現職院生Sのレポート内容の考察〉

自分自身の高等学校教師としての経験と重ね合わせたり、他校種の先生との考え方や見方の違いから視野を広げたりしながら自らの実践や教育を見直そうとする姿が読み取れる(下線①②③④)。事例研究ではQU理論で学んだことが小学校や中学校でどのように活用されているのか知り、また、ヒドゥンカリキュラム、開発的生徒指導といった他の理論を実践に活かそうと考えており、理論を結びつけた実践の必要性について言及している(下線⑤⑥⑦⑧⑨)。学年末レポートでは「これまでのクラス経営は集団ではなく、個に重点を置いていたように感じます。小・中学校の先生方のように集団をより良い方向にもっていきつつ、個の指導もできれば、どのような相乗効果が出てくるか楽しみです」と述べており、QU理論を学び、事例研究、授業参観と全15回学ぶ中で自身の教育観が変容してきている(下線⑩)。

5. 5. まとめ

抽出院生の小レポートから明らかになった学習の実際や変容を以下にまとめる。

〈知見〉

- (1) 一般院生と現職院生がグループで議論するなどの機会を設けたことで対話や協働の意識が高くなり同僚性が芽生えている。
- (2) QU理論の学習→事例研究→授業参観及び講話の全15回の授業を通して、現職院生にとっては経験に頼りすぎるのではなく理論と結びつけて考えること、一般院生にとっては広く理論を学び実践と結びつけること、両者共に理論と実践を結びつけることが重要であるという意識が強くなっている。
- (3) 思考の礎石となる理論を教授することは、そ

の後の事例研究や授業参観の着眼点となり、大学院生の学習に大きな影響を与える。

〈今後の課題〉

- (4) 各教科の授業づくりを高める授業内容を組み込む必要がある。
- (5) 対話的・協働的な学習を授業の中心に据えていたが、講義形式による教授の授業も必要である。

6. 研究の成果と課題

4章の学期末レポートの分析と5章の大学院生の学習の分析から、本稿の成果と課題をまとめる。

〈成果〉

- (1) 立場や経験の違う一般院生と現職院生が、全15回の授業を通して対話的・協働的に学習を進めることにより、同僚性が培われ、互恵的な学びが成立することが明らかになった。
- (2) 第1部の「理論の学習」が思考の礎石となることにより、第2部での「事例研究」と第3部での「授業参観と講話」を理論と結びつけて捉えようとする姿勢が育まれることが明らかになった。

〈課題〉

- (3) 大学院生は各教科の授業づくりの専門性を高めたいという高い意欲をもっていることから、そのための授業内容を本科目の中に構築する必要がある。

以上の考察より、本科目での取組に一定の有意義性を認めることはできるであろう。また、本稿で明らかになった知見及び課題は、本科目内にとどまらず、教職大学院の授業科目全般において、その学習成果の向上を図る際の手がかりの一つになると考えられる。

来年度への展望としては、上記の成果と課題を考慮し、講義形式の授業と対話的・協働的な学習を適宜取り入れながら授業の改善を図りたい。

【注】

- *1 授業参観時には小レポートを書く時間を確保できなかったため、学期末レポート（③授業

参観及び講話）から引用した。以降も同様。

【引用及び参考文献】

- 大谷尚(2011), 「SCAT:Steps for Coding and Theorization —明示的の手続きで着手しやすく小規模データに適用可能な質的での分析手法」, 『感性工学』, Vol10, No3, pp.155-160.
- 角屋重樹(2015), 「なぜ、教科教育なのか—教科の学びを通じた人間形成—」, 日本教科教育学会編『今なぜ、教科教育なのか—教科の本質を踏まえた授業づくり—』, 文溪堂.
- 河村茂雄(2010), 『授業づくりのゼロ段階 Q-U式授業集団づくり入門』, 図書文化社.
- 河村茂雄(2012), 『学級集団づくりのゼロ段階学級経営力を高める Q-U式学級集団づくり入門』, 図書文化社.

【付記】

本稿は、主として米田が1, 2, 3, 5, 6章を、竜田が4章を執筆するとともに、すべての章について両名で検討を行った。

【謝辞】

ご多忙のなか本講義にご協力くださいました、笹谷留里子先生、庄籠道子先生、梶原康裕先生、角田梓先生に、心より御礼申し上げます。

(2017年2月10日 受理)